

式亭三馬の未刊作品の広告

吉丸雄哉

はじめに

ある本の巻末広告に、同年に刊行されたと記されるが実際には刊行されていない作品、あるいは、近刊が予告されるものの、ついに刊行が確認されていない作品が存在する。このような作品の広告を本稿では、未刊作品の広告と呼ぶことにする。

未刊作品の広告について、中野三敏『江戸の板本』「近刊予告」は次のように説明する（1）。

（近刊予告について）特に洒落本や読本・滑稽本などの戯作類に多く、それらはおおむね「来〇歳新板」や「来春出来」等の文字を付して作者名と書名が記される場合が多いが、予告はされたものの、結局未刊に終るものも多いように、なかには初めから原稿もないまま、単にそれらしい書名を並べただけというものも少なくない。

後期の戯作小説類に見えるこうした例は「縄張」とも称して、本屋が流行作家の作品を完成以前から自家のものとしてかこい込むための手段でもあったようだが、実効のほどはよくわからない。

以上のように、ある作品の題名が広告に出るものの、その題名の作品が刊行されないことは、よくあることだが、未刊作品

の広告を考察することは有益である。

有名な例をあげる。上田秋成の浮世草子『諸道聴耳世間狙』（明和三年刊）と『世間妾形氣』（明和四年刊）の巻末広告には、「世間猿後編」とする『諸国廻船便』と「西行はなし」と小書をつけた『歌枕染風呂敷』の二作品が予告される。この二作は未刊のまま終わったようだが、怪談集であることや、「白峯」の主人公が西行であることなど、『雨月物語』（明和五年成、安永五年刊）にその構想が生かされたと推察できる（2）。このように、未刊作品の広告から他の実際に刊行された作品の考察ができる。

式亭三馬には、当初の構想と違った出版をした作品や、実際に刊行にいたらずに終わった作品が少なくない。三馬の未刊作品の広告を考察することによって、実際に刊行された作品だけを対象にする場合よりも、三馬自身について深く知ることが可能になる。

今回、三馬の近刊予告を総覧し、すべてをここに載せることは紙幅の関係もあり、不可能であるが、三馬にとって重要な近刊予告を紹介し、近刊予告の考察が作家研究に有用であることを示すのが本稿の目的である。

一、草双紙の場合。

三馬自身、執筆した作品のジャンルのうち、黄表紙・合巻といった草双紙の点数が最多であることもあるが、未刊作品の広告が一番多いのは草双紙のものである。実際に刊行されていて、近刊予告の時点から題名が変わるものも少なくない。

近刊予告から、角書と本題が入れ替わった例もある。たとえば、文化六年刊の三馬作『打諱譚』(山城屋藤右衛門板)の近刊予告では、

『選筆選筆 自然じねん著三吉』全八冊

前編勝川春亭、後編歌川国満。

とされた作品が、実際に刊行されたときは、『野蠻野蠻 忠孝振分道中雙六』(八巻二冊、文化六年刊、勝川春亭・歌川国満画、鶴屋金助板)が書名になった。

題名が変わって出版された例をもうひとつあげる。『敵討宿六始』(文化五年刊、西宮新六板)や『御堂詣御堂詣未刻太鼓』(文化五年刊、西宮新六板)に、近刊予告がある「真鳥塚まどりづか蘇生物語」は、竹田出雲の浄瑠璃『大内裏大友真鳥』を下敷にした文化九年刊の『鐵道鐵道 旧内裡ふるうちり鄙譚』(歌川国直画、森屋治兵衛板)となったと思われる。

もちろん、未刊のまま終わる作品も少なくない。『早替胸のからくり』(文化七年刊、西村源六・西宮新六・西宮太助板)巻末広告に、

● 著述なかばにいていまだ稿をはらぬ新編。○これは来年はやく売出し申候。

磯崎松の縁組 名所図会伊勢譚 六冊

歌川国貞画、近江屋権九郎版。
粧銚籠の縁物 物草太郎昔絵容 六冊

歌川豊国画、西村源六版。
折琴姫松嶋紀行 正本 五冊

▲ 此折琴姫は著作大半出来いたし候間来春は早く売出し申候、いつはりなし。

とあるが、これらの題名の作品はいずれも存在しない。原稿の大半が完成しているという「折琴姫松嶋紀行」は、『七癖上戸』(文化七年刊、西村源六・西宮弥兵衛・西宮平兵衛板)にも、

光盤みつばん無む茲ここ 折琴姫松嶋紀行 十五冊
式亭三馬作、歌川豊国画。

粧銚籠の縁物 物草太郎昔絵容 八冊
式亭三馬作、歌川豊国画。

右彫刻間に合ひ不申、当年取急とせうき候。当午(引用者注、文化七年)の初秋より早々売出し申候。

と予告されるが「物草太郎昔絵容」ともども未刊に終わっている。

近刊予告は同じ板元だけではなく、相版・販売などで提携のあった板元同士(たとえば西宮と西村と近江屋)では、他の板

元の近刊予告もすることがあった。また、ある板元で予告されたものが、他の板元で出版されることも珍しくなかった。

近刊予告が未刊に終わる場合は、さまざまであり、間に合わせのため、それらしい名前のみ入れたとおぼしきものもあれば、執筆が進んでいながらも、放棄された例もあるようである。

三馬の場合、寛政十一年刊の『俠太平記向鉢巻』(西宮新六板)の出版による筆禍がきっかけとなり、同年作品に見える近刊予告には、未刊のものが多い(3)。

三馬作『引返譬幕明』(三冊、寛政十一年刊、北尾重政画、西宮新六板)が近刊予告する、

岐倭駭嚇

該如來万八縁起

三。

咄怪經

無茶揃押兵

三。

儲撰

無学馬鹿式

折本。

増補

紅破血南京焼継

三。

瑣瑣野

式亭三馬楽日記

三。

の五作品は未刊に終わったようである(4)。

三馬は文政五年閏正月六日に亡くなる。文化年間の末ごろから、病気のため、執筆数そのものがめっきりと減っている。文政に入ってから近刊予告で、未刊に終わったものが多いのも、健康の問題からだと思われる。

『時花模様由禅染』(六卷三冊、文政四年刊、歌川国貞画、西宮新六板)には次のような近刊予告があるが、

松陰藏本

引書語三枳大夫 式亭作、国貞画、六冊。

藍細網お袖

江戸花三升格子

式亭作、国貞画、六冊。

偶社八

梅幸茶婀娜染色

三馬作、国貞画、六冊。

いずれも刊行が確認できない。三馬の死去のため、未刊に終わったと思われる。寛政頃にせよ、文政頃にせよ、予告のまま終わったであろう作品名が『新修日本小説年表』(大正15)に収録されている場合があるが、これらは実際の本を確認しないまま、広告に記された書名を収録したのではないかと推測する。

二、読本の場合

三馬は読本の執筆を得意とせず、生前には読本『阿古義物語』前編(四卷五冊、歌川豊国・国貞画、鶴屋喜右衛門・鶴屋金助板)を文化七年に刊行しえたのみであるが、その他にも読本の出版を企図していたことが広告からうかがえる。

文化三年刊の三馬作『敵討安達太郎山』(五卷一冊、歌川豊広画、西宮新六板)には、次のような広告が記される。

「鮎藻(あひくさ) 英雄羈譚」

英雄羈譚 初編十二冊。

応永の頃山中鹿太郎といへる鋭勇士のおひたちより日本武者しゆぎやうの記事、あはれなるはなし、おそろしき事をあつめたる面白き絵入よみ本。

同じく文化三年に刊行された滑稽本『小野篁諺字尽』(上総屋忠助板)には、

「鮎藻(あひくさ) 英雄羈譚」

英雄羈譚 よみ本

初編十二冊、三馬作 豊国画。

応永の頃の物語にて山中氏の英士日本武者修業の奇説をしるしたる面白き絵入本也。

とほぼ同文の広告が記される。ここで『敵討安達太郎山』は「絵入よみ本」という呼び方をしている。

これに關して、本田康雄は『武江年表』享和年間記事に「京大坂より画入り読本、新作あまた梓行して江戸へ下せり」とあることから、石田玉山、速水春曉齋、合川珉和などが執筆した上方板「画入り読本」から得た構想とみる(5)。また、文化四年刊の三馬作『箱根靈驗寢復讐』(六卷二冊、歌川豊広画、西宮新六板)の広告にある「あこぎものがたり あだちひめ物語——一名六あみだえんぎ」ながらのひとばしら」が「いづれもゑいりよみ本」と記されることや、文化五年刊の合巻『御堂詣未刻太鼓』(西宮新六板)・『敵討宿六始』(十卷二冊、西宮新六板)・『吃又平名画助刀』(西村源六・西宮新六板)の広告にも「あこぎ物語、山椒太夫、とのい物語」が「絵入読本」あるいは「読本」とされることに着目している。(6)。

一方、「ゑいり読本」に關して、これは読本と合巻の中間にあたる小説ではないかと、棚橋正博は考察する(7)。『式亭雜記』の中で文化五年刊の三馬作『両禿対仇討』(十二卷三冊、歌川国貞画、鶴屋金助・鶴屋喜右衛門板)を「絵入かなばかりのよみ本、まがひ合巻」とすることや、同じ十二巻の長編合巻である『金神長五郎忠孝話説』(十二卷三冊、歌川国貞画、西村源六板)を「国字小説」とするためである。

本田康雄は「あこぎものがたり」が『阿古義物語』となり、「あだち姫物語」が『明石物語』(文化六年刊)、「ながらの人柱」が『昔語兵庫之築島』(文化七年刊)となり、「山椒太夫」が『一對男時花歌川』(文化七年刊)となったとする(8)。

実際は、本田と棚橋の両案の折衷といったところで、「読本と合巻の中間にあたる小説」Ⅱ「国字小説」と読本との両方に使える大きな趣向をとりあえず「絵入読本」と称して近刊予告を行ったのではないか。読本を執筆する力の乏しい三馬にとって『阿古義物語』だけが読本となり、あとの趣向は文章の割合の多い長編合巻、すなわち「国字小説」に回されたといったところだろう。

結局、山中鹿之助を主人公とする「英雄羈譚」は、三馬の小説の趣向として確認されない。『十三鐘孝子續』(文化六年刊)という山中鹿之助が登場する合巻を曲亭馬琴が著したので、自作への利用を差し控えたのかもしれない。

同じく、未刊の読本としては、文化五年刊行の上総屋忠助の蔵板目録に、

續録 宿直物語 式亭三馬著、全部六冊。

があることを、棚橋正博が報告し、他の本が中本型読本であることから、中本型読本の企画だと推測する(9)。「宿直物語」は、先述のとおり、『御堂詣未刻太鼓』・『敵討宿六始』・『吃又平名画助刀』の広告にも見える。『吃又平名画助刀』の近刊予告を見ると、

「参入りよみ本之部」

あこき物語 一名十人きり 六冊。

とのい物語 六冊、画工より合書。

山桥太夫よこしま物語 三冊、豊国画。

勧善懲悪 一名小のゝたかむらぢこくものがたり

六冊、国貞画。

あだち姫 一名六あみだえんぎながらの人柱 五冊。

みの近江ねものかたり 五冊。

とあり、「宿直物語」も説本として執筆の予定だったとうかがえる。「みの近江ねものかたり」も該当の趣向の作品がない。「宿直物語」と同じく、融通のきく題名をとりあえず上げたといえようか。

なお、文化五年前後は説本・草双紙の様式・趣向を三馬が模索した時期である。未刊作品の広告もこの時期に多い。文化五年刊の『力競稚敵討』（八巻二冊、勝川春亭画、近江屋権九郎板）の下巻冒頭には、

「応需院本省略稗史副刻書目（はんもとののぞみにてしばはんをつまんでかくくさざうしおひ／＼にいでまするなだい）」として、次の作品を記す。

敵討権樓錦 全五冊。

敵討崇禅寺馬場 全五冊。

花樺会稽掲布染 全五冊。

菖萱桑門筑紫幟 全五冊。

花上野誉の石碑 はなの上のほまれ いしがみ 全五冊。

右何れも三馬縮文して追々出版仕候。売出しが節は御求御高覧可下候。欽曰。

院本（浄瑠璃本）の縮刷により、簡便に草双紙を出版するという目論見はあったものの、実行に移されなかったようである。そもそも三馬の合巻は浄瑠璃本から内容を得たものが多く、合巻との差異の少ない「縮文」を作る必然性も低かったのではないか。近江屋権九郎は三馬がかかわった版元では、新興で規模が小さい。新しい趣向の作品の出版には意欲的だったが、実行する力はなかったと思われる。

三、滑稽本の場合

内容の具体的な記述があることの多い滑稽本の広告は、三馬の未刊作品の広告のなかでも特に重要である。未刊であるが、具体的に内容が記されていることにより、刊行された作品と同じように、三馬の発想を明確に知ることができるからである。

滑稽本にはよくあることだが、三馬の滑稽本に関しても、続編の予告がある場合がほとんどとみてよい。人気が出れば続編を出し、不人気ならば打ち切りが常である。三馬作『田舎芝居忠臣蔵』二編（二巻二冊、文化十一年刊、鶴屋金助板）は「三編 五段目六段目をかしく著述候」と続編を予告するが続刊ない。不人気で続きが出なかった例であろう。

『七癖上戸』（文化七年年刊、西村源六・西宮弥兵衛・西宮平兵

衛板)は「新水鳥記二編 あとはますくおもしろくなり候。

これにもれたるさまくの生酔をうがちて来早春うり出し申し奉候」とする。『七癖上戸』はぎりぎりまで新水鳥記につけるつもりだったらしい。「これを新水鳥記と号することは……」とあり、「新水鳥記大意」が序文題なので、三馬は「新水鳥記」を題名にするつもりだったらしい。広告もそれにそったものである。

ただ、不人氣で続編が刊行されないとばかり見るのは早計で、『浮世床』二編(文化十一年刊)は「来春嗣て出す看官三編の発市を俟たば幸甚く」と近刊予告をするが、三馬の三編は未刊。三馬死後に滝亭鯉丈が三編を書くので、読者に不人氣だったとは思えず、三馬の執筆意欲に問題があったかと思われる。

再版本にも近刊予告は載る。『浮世風呂』前編に「文政三年庚辰仲冬十一月再補刻」の刊記のある再版本(早稲田大学)があることを棚橋正博が報告する(10)。再版本では「五編 来午春開板」とするほか、「六編七編 男湯之編 女湯之編」が予告される。

棚橋正博は『浮世風呂』四編の広告に初編(前編)から四編までが載ること手がかりに、前編の再版本が文政三年の刊行ではなく、「二編のすぐ出た後の文化七年春までの刊行と推定して」いる(11)。近刊予告が出版の考察のてかりとなる例のひとつである。

死後の作品にも近刊予告はなされる。三馬は文政五年に没しており、遺稿をもとに、文政九年に『稽古三弦』(式亭三馬遺稿、

二世南杣笑楚満人校正、歌川国直画、西村与八・大阪屋茂吉板)が刊行される。『稽古三弦』にも、

後編 そのつぎは 其続棹 そのつぎは

三編 心太棹 式亭三馬原稿、楚満人校正、歌川国直画。

の近刊予告が載るが、これらは刊行されずに終わった。

滑稽本の近刊予告は草双紙の予告に比べて、様子をみるためのものが多く、実際に刊行されないことが珍しくない。

文化十年刊の『浮世床』初編(鶴屋金助・柏屋清兵衛板)の巻上の九丁裏には、次の広告が載る。○のなかが実際の刊行年である。

当酉年新版中形絵入読本三馬戯作

田舎芝居忠臣蔵 初編、二冊。(文化十年)

譚話浮世風呂 四編男湯、二冊。(文化十年)

人間万事虚誕計 初編、一冊。(文化十年)

大千世界楽屋探 初編、一冊。(文化十四年)

四十八癖 二編、一冊。(文化十年)

三芝居客者評判記 残編、三冊。(未刊)

素人芝居正本仕立 初編、二冊。

『素人狂言紋切形』初編として文化十一年刊か)

古今百馬鹿 初編、一冊。(文化十一年)

人相酔狂集 俗云百つら 三冊。(未刊)

○好古愚癡録 三冊。(未刊)

敵討頓癡氣伝 一冊。(文化九年『忠臣蔵偏癡氣論』か)

○古今童謡考 三冊。(未刊)

○江戸奇人伝 五冊。(未刊)

○馬鹿夢短才図会 三冊。(未刊)

○風流つれ／＼草 二冊。(未刊)

○風俗夢物語 五冊。(未刊)

一盃綺言 初編、一冊。(文化十年)

右の内○印あるはいまだ稿終らず。

文化十年は癸酉なので、後刷本に載った広告ではない。実際に刊行された作品が多いが未刊のものも少なくない。原稿が執筆済みとなっている作品でも未刊のものがある。

このうち、「三芝居客者評判記 残編」に関しては、文化七年刊行の『客者評判記』(三巻三冊、歌川国貞画、鶴屋金助板)の巻末広告に、

客者評判記残編 全三冊 初編もろともうり出し申候。

此まきは客者おの／＼あいきやうふかき面／＼ゆゑ初稿にまさりておかしみたつぷり、腹筋のよれることども多く著たる小冊也。初編御覽に引続て御高覧被下候脇奉願候以上。とある。三馬の合巻『風雲井物語』(文化八年刊、歌川国貞画、鶴屋金助板)にも「客者評判記残編」の広告がある。初編の執筆時には続編の構想があつたことがうかがえるが、未刊に終わった。実際に原稿を書き進めていたかは、わからない。

「人相酔狂集 俗云百つら」も未刊である。三馬の『早替胸のからくり』(文化七年刊、西村源六・西宮新六・西宮太助板)

の近刊予告にも「人相酔狂集」がある。

人相酔狂集 俗に百つら

来春開板 式亭三馬戯作。これは百つらといふて、男女老少いろ／＼のをかしかほをゑがき、其相のかたはらにもしろき詞書を書くはへたれば、ひやうひやくのおやだま、をかしみたつぷりのゑいりよみ本なり。

三馬の滑稽本『小野篁識字尽』(文化三年刊)は「人相小鑑」として福相を説明するほか、「人相図論」として「金があり相」「吝相」「やかまし相」「腹を立相」など全十二相を二丁半にわたって紹介する。この発展を考えていたか。

具体的な内容の近刊予告が残るのが「好古愚癡録」である。「好古愚癡録」は文化十年刊の滑稽本『癡癡 藏意抄』(万寿亭正二(二代目並木五瓶)作、式亭三馬補綴、歌川豊国画、西村源六板)の巻末に詳細な内容が記される。『藏意抄』の「好古愚癡録」広告は次のとおり。

当秋発兌

式亭三馬銅駝先生編輯、門人徳亭三孝学亭三子全校。

好古愚癡録 初編、全二冊。

此書は虚言八百年来未見未聞の珍奇好事家の手にいらぬものばかり拾ひ集めて形を図にあらはしこじつけの古書を引き出たための考をするす。すべて古書画古器のしなぐを好古日録好古小録桂林漫録の趣に擬し寔に癡呆のかぎりをつくして尚古の諸君子のお笑をとる。此草稿大半出来有

之候。所々葛葉散人藏意抄の著述出来いたし三馬先生と
同案に御座候間、幸ひに先生の筆を乞ひ、増補校閱を需め
候て発兌仕候、御評判奉希候。板元文刻堂。

『藏意抄』は「高師直之艶書」「足利館四足門之古瓦」など、忠臣蔵ゆかりの古物を図入りで説明した滑稽本である。文化九年刊の三馬作『忠臣蔵偏癡氣論』（歌川国直画、鶴屋金助板）にひき続き、忠臣蔵を題材とした滑稽本だが、『忠臣蔵偏癡氣論』が人物評判であるのに対し、『藏意抄』は好古趣味の内容である。

『好古愚癡録』があげる藤貞幹『好古日録』（寛政九年刊）・同『好古小録』（寛政七年刊）や桂川中良『桂林漫録』（天明二年刊）のようにいにしえの古書画古器を収録した書のちやかしを指摘したようである。もちろん、『好古愚癡録』という題名そのものが『好古日録』のもじりであろう。銅駄先生は『忠臣蔵偏癡氣論』の種本である『忠臣蔵人物評論』（天明一年刊）の作者である屈屈道人（畠中観斎）の別号銅脈先生をもじったものか。『好古愚癡録』には詳細な近刊予告がのるが、伝本を聞かず、何らかの事情で出版されなかったであろう。

「敵討頓癡氣伝 一冊」は『忠臣蔵偏癡氣論』（文化九年刊）か『藏意抄』（文化八年初冬成、文化十年初春刊）として刊行されたのであろう。

「古今童謡考」から「風俗夢物語」までの五作品は実現の可能性が低く、題名だけを間に合わせたものと思われる。

その他、実現しなかった滑稽本には、『麻疹戲言』（享和三年

刊、万屋太治右衛門板）が近刊予告した「縮緬詩話」がある。内容は次の通り。

式亭三馬著 縮緬詩話 巾箱本一冊近刻

袁倉山が随園詩話に倣て、江戸諸名家秀作なる懐旧の狂詩話なればちりめんしわと号るもの也。

清代の文人である袁枚が詩に関する説話を集めた『随園詩話』に想を得た狂詩説話集の予定のようである。「江戸諸名家」がどのような作者を念頭に置くのか不明であるが、おそらく寝惚先生（大田南畝）は当然含めねばならず、戯作壇から身を引いていた南畝に触れることに差し障りがあり、刊行は難しかったと思われる。

企画から刊行まで時間がかかったのは、文化十四年刊の『大千世界楽屋探』である。文化八年刊の合巻『風雲井物語』（文化八年、歌川国貞画、鶴屋金助板）広告の「三千世界楽屋探」が原型である。

絵入読本 情機機探 三千世界楽屋探

式亭三馬戯作、初稿全三巻。

をかしくてこたへられぬよみ本、趣向はえりどり十二門部分総目。

当未正月二日より正本売出し申候。

と、辛未の年、すなわち『風雲井物語』と同じ文化八年正月の売出しを予告するが、実際の刊行は、六年後であった。「三千世界楽屋探」の広告は一丁に近い分量がある。「乾坤」「時候」「神

祇「人倫」などの標目を立てて、さらに細分化した内容を記す。たとえば、「乾坤」を見ると、

乾坤 ●春雨と夕立と雨ふりかたぎ。 ●五日の風と十日の雨とねんごろあひ。 ●雷公と地震のちからくらべ。 ●富士山と琵琶湖の夫婦中付り浅間山のをかやきもち并二東海道と木曾街道の身巖眞 ●三ヶ津の国じいまん ●日本三景と三大河とあらそひ。

と記す。このような、奇妙な標目をならべること自体におかしみがあつたのだらう。「三千世界樂屋探」の標目は、『大千世界樂屋探』にも引き継がれる。『大千世界樂屋探』「大千世界樂屋探標目」の「乾坤之部」では、

○春雨と白雨連牆の闘諍。 ○鶯と蛙が俳諧歌の会筵。
はるきめ ゆふだちのきかひ あらそひ うぐひす かはす たはれうた くわいえん
かみなり ちしん ちからくらべ おにがはら かざみ からす

と記される。

このような標目のうち、『大千世界樂屋探』では「人倫之部」から「熊谷と敦盛と一谷組打の寔説」、「雑之部」から「一切諸精霊孟蘭盆会の述懐」、「器財之部」から「蛭尾と試風の鳥形との夕涼」が取上げられ、会話体による滑稽なやりとりが詳しく記される。『風雲井物語』の「三千世界樂屋探」の近刊予告末尾には、

以上初編三冊著述出来。

右は趣向はなはだひろきゆゑ追／＼おかしきしな／＼をとりあつめ毎年一編を幾篇にも著述仕候。まづ当年は右目録

の通り、初編三冊売出し申候。御もとめ御二笑奉希候以上。とあるものの、『大千世界樂屋探』のような、会話体の滑稽本として完成していたわけではなく、「三千世界樂屋探」の段階では、多くのおかしな標目を簡単に説明する内容ではなかったかと推測しておく。

四、末雅比萬葉集

三馬の未刊作品のうち、もつとも興味をひくものは「末雅比萬葉集」である。

三馬の滑稽本『一盃綺言』(文化十年刊、津村三郎兵衛・西宮平兵衛・石渡利助板)は次の広告を載せる。

しきの屋三馬大人編著、末雅比萬葉集全三冊。
附録 類冠 辞一寸抄

みやびならぬを万葉にくらぶとはけさくしやだましひのめくらへび物におぢざるしわざなり。これは狂歌にあらず、つめ歌にあらず、はしにもぼうにもかゝらぬ手ぶりをあらたにひらきたるいにしへぶり。かのまがひ八丈まがひ結城にひとしきまがひ万葉の和歌者流、三馬がはじめた歌なれば、馬歌とよびてしかるべきをさとびうたとぞなづけにける。

題名から『万葉集』のやつしだと推測できる。「末雅比萬葉集」の刊行は実現の可能性が高かったのではないかと思われる。

三馬の滑稽本『人心覗からくり』(文化十一年刊、西村与八・

山崎平八・天満喜平・加賀屋源助・鶴鶴長治板」の「見えぼうを第一とする人の表」では、通人めかした男が次のように語る。

もし大人、最う俳諧も倦る。歌はもとより否気になつたから、をつりきなものをおもひつきやした。彼まがひ八丈、まがひ南部編などから産だ趣向で、まがひ万葉といふ歌の体さ。いはゞ和歌者流の新道とも謂つべきものだテ。まづ狂歌と詰歌の桶間をいくやつだネ。聴てくんなせへ酔人を詠る。

おほみきの かすくれなまゑ なまろびそ

酒 粕 食 生 酔 勿 転

どろちまたに こけたら くだまこ

泥 街 倒 管 巻

ナントをつでござへせう。これは三馬が詠むからつひ口つきにかぶれたのさ。此てぶりの歌が多くあれど追て御披露。しかもさどび歌といふ集が出来てあるが、タシカまがひ万葉と号て発市するさうさ。

未雅比万葉集とかいふ洒落ス。

三馬は国学に興味があつた。『浮世風呂』三編下(文化九年刊)での、かも子とけり子の国学談義は、三馬の国学への関心をよくあらわすものである。三馬の国学への関心のひとつは音韻であらう。会話体の正確な表記を志す三馬にとって、音韻や表記法に関して、国学に関心があつたのではないか。『浮世風呂』二編上(文化七年刊)では、江戸の女お山とかみがたすじの女と

の会話で、お山に五音相通や『万葉集』での「べい」言葉について話させている。『浮世床』初編(文化十年刊)自序に「国学者」「国学大人」を登場させ「かみぬどん」の考証をさせて笑いをとるのも、国学者を知悉しているといえる。

『大千世界楽屋探』上(文化十四年刊)には、「どさ詞」を「せりうりの博物先生」が解説する部分がある。これも偏痴氣論のひとつである。その欄外注に、

語釈は考へずとも扱あるべし。只詞のつかひざま用ひざまをむねと考ふべきよし鈴廼屋の大人もの給ひき。やくなき語釈はこしやくとやいはむ、あとのかんがへさきへ往たらば考とらしよともいふべし。

とあるが、これも本居宣長『うひ山ぶみ』(寛政十一年刊)にある語釈への態度を想定してだろう。『うひ山ぶみ』(白石良夫全訳注本居宣長『うひ山ぶみ』講談社学術文庫、平成21・4。165頁)には、

語釈は緊要にあらず。

語釈とは、もろもろの言の然云ふ本の意を考へて釈くいふ。たとへば天といふはいかなること、地といふはいかなることと釈くたぐひ也。こは、学者のたれもまづしらまほしがることなれども、これにさのみ深く心をもちふべきにはあらず。こは大かたよき考へは出来がたきものにて、まづはいかなることもしりがたきわざなるが、しひてしれでも事かく事なく、しりてもさのみ益なし。

されば、諸の言は、その然云ふ本の意を考へんよりは、古人の用ひたる所をよく考へて、云々の言は云々の意に用ひたりといふことをよく明らめ知るを要とすべし。言の用ひたる意をしらでは、其所の文意聞えがたく、又みづから物を書くにも、言の用ひやうたがふこと也。

とあり、三馬がこの部分を念頭に置いたのは明らかであろう。

三馬の国学ならびに『万葉集』への関心は諸資料よりわかるが、実現の可能性の高かった「末雅比万葉集」はとくに、三馬の関心の高さを伝える。

おわりに

以上、あらあら、三馬の未刊作品の広告を見てきた。今回、紹介した三馬の未刊作品の広告はもちろんすべてではない。草双紙を中心に多くの未刊作品の広告がある。未紹介分は、とりあえず判明したものを「付記」として巻末に記した。

三馬の未刊作品の広告は次のような場合に分けられる。

- 1、広告から、題名だけが變つて出版された場合。
- 2、広告から、題名と内容が大きく變更されて出版された場合。

3、続編を予告し、ついに刊行されない場合。

4、新構想の作品がついに出版されないまま終わる場合。

1と2は、何らかの書籍が出版されたので、厳密には未刊ではないが、当初の構想とは變更がある場合である。

3と4は実際に未刊に終わる場合である。このうち、3は滑稽本に関しては珍しくない。滑稽本はとりあえず続編を予告し、売り上げがよければ、続編を出し、不人気であれば、そのままにするのが常だからである。

4は、角書と題名だけ記される草双紙の場合と、より詳細な内容の予告がある滑稽本と大別できる。近刊予告しても刊行されない草双紙は多い。最初から刊行するつもりもなく、書名を並べたもののほか、事件・多忙・病氣などの諸事情によって、刊行できなかったものがある。

近刊予告されるものの未刊に終わった作品は、もとより存在しない作品である。よって、刊行された作品と同様に、作家論や他の作品論に資するものとして、見るのは適當ではないかもしれない。しかし、未刊ながらも、ある作家の頭のなかにできた構想であることは間違いない。また、近刊予告は現在の読者を未来の作品につなぐために書かれたもので、そこに思考の道筋が見える。よって、ある作家の特徴をよく知るための手がかりとして、一つの作品と同様の価値をもつものも、未刊に終わった作品の広告のなかにはあるとはいえないか。

注

(1) 中野三敏『江戸の板本』第六章「予告・広告・蔵版目録」の「近刊予告」(岩波書店、平成7・12、189・190頁)参照。

(2) 長島弘明『雨月物語の世界』(ちくま学芸文庫、平成10・

4、44・45頁 参照。

(3) 棚橋正博『式亭三馬』13『懸壺録 俠太平記向鉢巻』の筆禍とその後(ベリかん社、平成6・11) 参照。

(4) 棚橋正博『黄表紙総覧』後編(青裳堂書店、平成1・11、200・201頁) 参照。それによれば、『新修日本小説年表』は『紙襦 紅破皿南京焼継』(黄表紙、三冊、歌川豊広画、和泉屋市兵衛板)と『蝶儺松野 該如来万八縁起』(黄表紙、三冊、歌川豊広画、和泉屋市兵衛板)がこの年刊行とするが

実際は未刊と考えられる。享和三年刊の和泉屋市兵衛板の黄表紙『敵討安積車』など) 巻末の出版目録からの採録であろう。同書の書名は寛政十一年の西宮新板目録に名前が載るが、『俠太平記向鉢巻』の筆禍で途絶え、改めて和泉屋から注文を受けたが、享和三年・文化元年(ろ)の三馬の多忙のため、未刊に終わったと考えられる。

(5) 本田康雄『式亭三馬の文芸』(笠間書院、昭和48・3、135頁) 参照。

(6) 注5前掲書、202頁参照。

(7) 注3前掲書、203・204頁参照。

(8) 注6と同箇所参照。

(9) 注3前掲書、203頁参照。

(10) 棚橋正博「浮世風呂について」『江戸文学』20号、平成11・6 参照。

(11) 注10前掲書、35頁参照。

付記 三馬の未刊作品の広告 本文未紹介分

● 『俳優三階興』(役者絵本、二巻二冊、享和元年刊、歌川豊国画、西宮新六・万屋太治右衛門板)

芝襦 俳優節用集狂言袋 三馬作、全一冊。来ル戌の初春うり出し申し候。

● 『封鎖心 鑰匙』(享和二年刊、西宮新六板)

芝襦 俳優節用集狂言袋 大本一冊、三馬作、豊国画。

右は江戸三芝居の古事を初て、当時の事までを節用集になぞらへたるおもしろく絵入よみ本。もつともにがほ生うつしなり。

● 享和三年刊の『劇場訓蒙図彙』(勝川春英・歌川豊国画、西宮新六・万屋太治右衛門・永楽屋東四郎・箸屋善助・石渡佐助・勝尾屋六兵衛板) になったと思われる。

● 『敵討安達太郎山』(文化三年刊、西宮新六板)

見立年代芝居通宝記 一枚。

名代新造坐禅豆 一枚。

● 入込銭湯一口淨瑠璃 一冊。(『浮世風呂』の原型か)

● 『御堂詣末太鼓』(文化五年刊、西宮新六板)

鈴嬢 米饅頭お米仇討。

● 米饅頭 小糸結辛苦打紐。

● 真鳥塚蘇生物語。

● 復讐大神塚。

空のほとけに託せばは佳作 歌祭文雲助由来。

●『敵討宿六始』(文化五年刊、西宮新六板) 到同じ広告。

●『玉藻前三国伝記』(文化五年刊、森屋治兵衛板)

編 妖狐伝悪念濫觴 全六冊 式亭三馬作、勝川春亭画。

いまだもろこしへわたらざるむかしく九つの尾となるゆらいをしるす、しうねん物かたり。

同じく文化五年刊の『難有孝行娘』(森屋治兵衛板) にも同じ広告。

●『吃又平名画助刀』(文化五年刊、西村源六・西宮新六板)

玉ものまへ 三冊。

(翌年の『玉藻前三国伝記』(三卷一冊、勝川春亭画、森屋

治兵衛板) か)

三国伝来なごり狂言玉ものまへ二番目始り 三冊。

(同年の『玉藻前竜宮物語』(三卷一冊、歌川国貞画、近江

屋権九郎板) か)

きんもう白面妖狐伝あくねんの始り 七冊。(該当作不明)

●『力競稚敵討』(八卷二冊、文化五年刊、近江屋権九郎板)

●『玉藻志業 玉藻前餘光』

●『玉藻志業 玉藻前竜宮物語』(文化五年刊、近江屋権九郎板)

姉は鑑 果毅太郎忠孝談 全八冊 三馬作、春亭画。

来巳のとし新板絵さうし当辰初秋売出し候。

●『蟒蛇於長嫩草紙』(七卷二冊、文化五年刊、歌川国貞画、浜

松屋幸助板) 上巻広告

●『お氏衛門 有田唄お猿仇討 全部六冊

式亭三馬編、歌川国貞画。

●『無根草夢譚』(文化六年刊、近江屋権九郎板)

親敵空気始 式亭三馬作、勝川春亭画。

●『金神長五郎忠孝話説』(十二卷三冊、文化六年、歌川国貞、

西村源六板)

●『總角が瀬瀬 往時縁仇討 全八冊

式亭三馬作、歌川国貞画。

文化十一年刊の『變遷 名揚卷兩個助六』(六卷一冊、歌川国貞画、鶴屋金助板) となつたか。

(角) 隅田堤の仇討は玄兵衛権の事蹟

逢初川の龜打はお玉が池の由来

むかしうたとがねももん

●『松竹梅女水滸伝』後編(文政四年刊、山本平吉板)

●『心花朝顔合 三馬作、をかしき多いり中形よみ本。

全一冊、当巳夏開板。

※なお、本文引用の際は適宜句読点を補つた。

〔よしまる・かつや 本学教員〕